

千慮一得論上篇

井上毅



第一

近來社會學者ノ説ニ從ハハ凡ソ人ノ集マリテ國ヲ  
成ス者ハ其外来ノ障碍ト及氣候風土ノ衛糿ニ適セ  
スシテ從テ進歩ヲ妨クル事情アル場合ヲ除ク外海  
ノ東西ヲ問ハズ人種ノ異同ヲ問ハズ不斷變遷ノ年  
期ヲ經過シテ次第ニ級ヲ逐テ進化シ以テ文明殷富  
康樂ノ境界ニ到着セザルコトナシ是レ恰モ人ノ幼  
ヨリ少ニ進ミ少ヨリ壯ニ至ルカ如ク一定ノ自然法  
アリテ之ヲ支配スル者ニシテ人為ノ事業ハ僅ニ之  
ヲ翼賛補糿スルニ過キザル者ナリト云



其レ然リ然リト雖各國進化ノ間或ハ偶然ノ事故ニ  
由リ或ハ人性免レザルノ缺所ヨリ生スル迷謬ニ由  
リ或ハ非常ナル兵亂ノ殘滅荒廢ニ由リ或ハ太平媮  
安ノ萎靡ニ由リ中道ニシテ退歩シ又ハ停滯シテ更  
ニ轉進スルコト能ハザル者アリ此ノ如キノ國ハ往  
往自然淘汰ノ天法ニ由リ其國ノ獨立ヲ保ツコト能  
ハズシテ自ラ滅亡ヲ招キ他ノ先進ノ國ヨリ併吞セ  
ラル、ニ至ル亦怪ムニ足ルコトナシ  
斯ニ一國アラシク退歩停滯ノ位地ニ沈ンテ其  
進機ヲ怠廢ノ極ニ付シタランニ一朝警覺スル所ア

リ手ニ唾シテ起リ轉シテ他ノ先進各國ト競争セン  
トスルニ當テハ銳進決行勇往直前ノ一方アルノ外  
何ノ狐疑スル所カアラシ此ノ大事ヲ了解セザル者  
ハ今日ノ時機ニ醉生夢死スル者ナリ  
抑一國興廢ノ係ル所細小ノ障碍ハ一モ顧慮スル所  
アルニ足ラズト雖此ノ百紛ヲ排キ百難ヲ突イテ一  
方ノ進路ヲ求ムルニ急ナルノ日ニ當テ猶細心ニ注  
意留念シテ歩々循守セザルコトヲ得ザル者ハ唯々  
自然進化ノ天法是ナリ  
改良急進ノ日ニ當テ之ヲ妨クル者ハ苟安ノ愚民ニ



非ザルナリ又守舊ノ黨類ニ非ザルナリ蓋財計ヲ除  
クノ外一モ此大勢ノ一大障碍物タルニ足ルモノナ  
カルヘシ此レヲ進軍ノ輜重ニ譬フ輜重ノ累ヒナカ  
リセハ一日百里ヲ行クト雖可ナリ

改新ノ政百廢俱ニ起リ簡易ヲ變シテ文明ニ就キ凡  
ソ各般ノ構制舊ニ依ル者皆一朝ニ破毀シテ以テ新  
規ヲ建設セザルコトヲ得ズ政府ノ財政此時務ノ急  
ニ應シテ給足スルコト能ハザルハ怪ムニ足ルコト  
ナク如何ナル政事家如何ナル經濟家アリト雖此時  
ニ際シテ輕租薄歛以テ出入ヲ支フルコトハ決シテ

望ムコト能ハザル所ナルヘシ  
轉シテ國民ノ財計ヲ論スルニ政府ノ財政窮ヲ告ル  
ハ仍ホ其一端タルニ過キズ全國ノ民俗舊ヲ變シテ  
新ニ就クノ日ニ當テ一方ニ於テハ從來ノ生産工業  
頓ニ其價ヲ失ヒ而シテ新規ノ事業械ニ練熟ニ至ル  
コト能ハズ他ノ一方ニ於テハ目目肉躰ノ喜フ所、交  
際ノ促ス所、文明華麗ノ事物、需要日ニ急ニ嗜好日ニ  
切ニシテ、自ラ節度牽制スルノ能力ヲ闕クニ至ル、是  
ニ於テ、賣ル物ノ售ラル、ヨリモ、買フ物、格外ニ其比  
例ヲ増シ、或ハ買フコトニ急ナルカ為ニ賣ル物ヲ賣



崩シ、祖先以来ノ儲蓄ナル貨<sup>財</sup>ヲ放出シテ、隄防ヲ決  
シ、瀦水ヲ行ルカ如ク、貧キ者産ヲ失ヒ、富ム者産ヲ減  
シ、肉落チ骨立チ、一年一年ヨリ窮シ、全國ヲ擧テ全ク  
財利ノ活動ヲ失フニ至テ、猶止ム所ヲ知ラザラント  
ス、是レ畢竟人智ノ弱點ヨリ起ル者ニシテ、改新ノ際  
ニ免ル、コト能ハザルノ疾疫ナリ  
抑彼ノ先進ノ國ハ嘗テ此ノ如キ厄運ヲ経過シ来リ  
シヤ、若シ先進ノ國ノ歴史ヲ閱スルニ此ノ如キ厄運  
アルヲ見ザリシナラハ何故ニ獨リ後進ノ國ノ此地  
ノ不幸ナル疾疫ニ罹ルコトヲ免レザルヤ、蓋生産ト

消費ト其比例ヲ得レハ物トシテ儉約ナラザルハナ  
シ、生産ト消費ト其比例ヲ失ハハ物トシテ奢侈ナラ  
ザルハナシ、故ニ奢侈ハ其物ニ存セズシテ其物ヲ使  
用スルノ國又ハ人ノ位置如何ニ存スルハ、經濟家ノ  
常言ナリ、今此常言ナル論理ヲ應用スルニ當テ

第一 先進ノ國ニ於テハ、人民ノ風俗慣習ハ自然  
ノ順序ヲ經テ徐々ニ變遷シタルヲ以テ、從テ衣  
食百般需要ノ事物粗ヨリ精ニ移リ、質朴ヨリ華  
美ニ移ルノ際亦許多ノ歲月ヲ經恰モ生産力ノ  
知識上ヨリ漸進スル者ト同一比例ノ順序ニ於



テ進行シタリ

第二 先進ノ國ニ於テハ自然ノ進化ヲ誤ラズシ

テ多分ハ生産力ハ常ニ嚮導者トナリ而シテ消

費力ハ其隨從者タリシ

然ルニ後進ノ國ニ於テハ人民ノ風俗慣習自然ノ順  
序ヲ經ズシテ疾行急歩ノ際ニ變遷スルヲ以テ日用  
事物ノ消費力ニ係ル者ハ油薪ニ火ヲ放ツカ如ク一  
時過度ニ増進シ而シテ生産力ノ知識學問ニ倚賴ス  
ル者ハ冷水ヲ温メテ熱湯トナスカ如ク必ヤ其須要  
ノ順序ト時間トヲ經過セザルヘカラザルカ故ニ彼

此同時ニ進行スルコト能ハズシテ其比例ヲ失ヒ懸  
隔ノ差度ヲ生スルニ至ラシム之ヲ卑近ナル重學ノ  
理ニ譬ヘンニ先進ノ國ハ一ツノ坂ニ兩丸ヲ轉スル  
カ如シ其惰力平均ナルヲ以テ兩丸同一比例ニ進行  
シテ同時ニ一所ニ到着スルコトヲ得タリシニ後進  
ノ國ハ一ツノ坂ニ圓滑ナル球丸ト又四角ナル圭石  
ヲ轉下シ圓丸ハ瞬時ニ急下スルモ四角物ハ中途ニ  
澹滯シテ同時ニ轉行スルコト能ハザルカ如シ生産  
ハ知識ト經驗ニ關係スルヲ以テ其必要ノ順序ト時  
期ヲ闕畧スルコト能ハザルハ恰モ四角ナル圭石ノ



如ク消費ハ肉躰又ハ儀式ニ關係スルニ止マルヲ以  
テ輕々ニ進行スルヲ得<sup>テ</sup>順序ト時期ヲ必要トセザル  
コト恰モ圓丸ノ坂ヲ下ルニ均シキナリ  
今又後進ノ國ハ何故ニ先進ノ國ノ生産ト消費トヲ  
比例<sup>並</sup>行セシメタルコトヲ得タルニ倣フノ能力ヲ  
有セザルヤトノ問題ヲ設ケンニ是レ先進ノ國ノ人  
民ノ智ニシテ後進ノ國ノ人民ノ愚ナルニ非ス即チ  
後進ノ國ノ開化ハ本ト自力ニ倚賴セズシテ他力ニ  
感動セラレタルモノナルカ故ニ一時目移リ心動キ  
テ自然進遷ノ順序ニ遵フコト能ハズ本末華實ヲ轉

倒シ易キヲ先ニシテ難キヲ後ニスルノ病ヲ免ル、

コト能ハザルニ由ルナリ獨立ノ成否ニ付キ疑問ノ

間ニ居ル者ナリ歐洲ノ大言ヲ為ス者ハ東洋各國ノ

命運ハ二十年内ニ決スルナラント云トイヘリ曾テ

人アリ余カ為ニ未来ノ想像ヲ描畫シテ曰東洋ニハ

恐クハ左ノ兩様ノ國ヲ現出スルナルヘシ

甲 版圖廣大物産殷阜ノ國ハ<sup>○</sup>持ム所アリ

テ自尊ノ風ヲ持シ奮テ改進ノ途ニ就クコト能

ハ必ズ速ニ病羸ノ巨象豺虎ニ制セラレ、ノ象ヲ

見ルニ至ルヘシ







乙 他ノ改進ニ勇銳ニシテ文明ニ競争スルノ國  
ハ意外ニ經濟上ノ妨碍ヲ被リ水液涸盡シテ樹  
木凋瘁スルノ象ヲ見ルニ至ルヘシ  
此ノ如キノ説話ハ往々徒ニ人意ヲ弱カラシメ毫モ  
効果ナキ者ナレハ固ヨリ取ルニ足ラズト雖此レ亦  
國ノ先覺タル政事家及碩學者ノ為ニ一ノ警戒タル  
コトヲ失ハザルヘシ  
東洋各國ヲ以テ西洋ニ比較スルニ航海通商及殖産  
移民ノ事ニ就テハ實ニ三百年ヲ遅クシ陸海軍制ニ  
就テハ實ニ二百年ヲ遅クシ器械製造ノ工事ニ就テ

ハ實ニ百年ヲ遅クス今試ニ西洋各國ノ資本ト我國  
現存ノ資本トヲ以較スルトキハ彼ハ<sup>我カ十倍以</sup>我<sub>上</sub>ニシテ我  
ノ以例ヲ顯スコトヲ見ルヘシ有形ノ資本既ニ然  
ルトキハ無形ノ資本モ亦之ニ准スル者ト假定シテ  
大差ナカルヘシ  
抑疾ノ身ニ在ル者ハ其病ヲ反省スルノ觀察力ニ乏  
ク却テ其患害ヲ遺忘シ或ハカノテ苦悶ヲ消遣スル  
カ為ニ故意ニ外物ノカヲ假リテ一時ノ快適ヲ取ラ  
ントスル者アルハ是亦人性ノ自然ヨリ来ル者ナリ  
東洋各國ハ其學識實業ニ於テ此ノ如キノ劣等ノ位



地ニ居ルニ拘ラズシテ甲ハ自尊自大ニシテ專虚名ヲ恃ミ乙ハ太早ニモ外面ノ文明ヲ粧飾シテ先ツ肉軀上ノ奉養ト儀式上ノ虚文ニ於テ西洋ノ現象ヲ摸擬シ其需要巨大文費浩翰ニシテ毫モ劣位ノ實跡ニ補ナキノミナラズ此レニ由テ迅速ニ其經濟ヲ誤マ  
ルニ至ラントス此ノ西様ノ國ハ其病ノ症候ハ殊ナ  
リト雖自其疾ヲ回護シテ根治ノ醫方ヲ誤マルニ至  
テハ之ヲ同一ノ結果ニ歸セザルコトヲ得ズ此レ皆  
自然進化ノ天法ニ循ハズシテ一ハ遲滯ノ尖弊ニ墮  
落シ一ハ進行軌道ノ必要ナル順序ト年期ニ向テ細

心注意セザルノ致ス所ナリ  
此ノ如ク説キ下セハ當局其人ニ向テ進行ヲ誤ルノ  
責ヲ歸スヘシト云カ如シ其レ然リ豈其レ然ランヤ  
一國ノ盛衰強弱ハ大抵百餘年前ヨリ養成セル積弊  
ノ結果ニシテ一朝一夕ノ偶然ノ事故ニ起因スル者  
ニ非ス故ニ政事家ノ志操ハ即テ國民ノ實力實勢ノ  
結晶セル英華ニシテ政事ノ方嚮ハ國民思想ノ反照  
タルニ過キズ縱令英傑ノ人アリテ多少鞭策振作ス  
ル所アルトキハ以テ衰運ヲ挽回シ人心ヲ激勵スル  
ノ効力ナシトセズト雖到底鑿家ノ疾ヲ治メ水理家



ノ水ヲ治ムルニ均シク亦天然ヲ補助スルノ範圍ニ  
止マル者ナリ故ニ國ノ衰運ハ畢竟自然淘汰ノ天法  
ヨリ来リ國民一般父祖以来ノ懈怠ヨリ起因セル結  
果ニシテ豈當局其人ノ過失ナラン乎哉古人云ヘル  
コトアリ大厦之傾非一木所能支ト

第三

國ノ盛衰ハ積弊ノ致ス所ニシテ其時ニ臨メル當局  
其人ノ功罪ニノミ歸スヘカラザルハ前段ニ説ケル  
所ナリ然ト雖凡ソ物ヲ養フコトハ難クシテ物ヲ敗  
ルコトハ易シ物ヲ助ケテ長大ナラシムルハ一朝ノ  
能ク為ス所ニ非スト雖物ヲ傷害シテ衰滅セシムル  
ハ或ハ終朝ヲ待タズシテ能クスヘシ庸醫ハ天然ヲ  
補養セズシテ却テ病勢ヲ助長シ激進セシムルコト  
ナシトセズ  
一新ノ後誰レ云フトナク又一人一人ノ著述ヲナシテ



之ヲ世ニ問ヒタルニ非サレ<sup>レ</sup>何<sup>ツ</sup>時ノ間ニカ一個ノ  
定論ノ如ク朝トナク野トナク我カ日本人ノ腦漿ニ  
浸漸シテ其根蒂ヲ固結シタル一種ノ新奇ノ説アル  
カ如シ

其説如何曰人民生活ノ低度古ル者ハ其開化ニ進マ  
ガルノ北候ナリ故ニ先ツ衣食需要ノ度ヲ高尚ナラ  
シメ華麗膏腴ノ嗜好ヲ進メ人民ヲシテ財利ノ慾ヲ  
活潑ナラシムルトキハ生産従テ興リ商賣従テ繁昌  
シ一國以テ富强ノ塗ニ向フコトヲ得ヘシト<sup>ル</sup>當<sup>同</sup>  
此説ハ一局部ニ適當スヘキ一理アルノ論ニシテ全

賦ニ普通ナル完全ノ論ニ非ス即テ語ヲ替ヘテ言ハ  
ハ似テ非ナルノ論ニ過キザルノミ<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>  
ウラルテル氏ノ説ニ曰貨幣ハ融通シテ藝術ヲ發達  
シ工業ヲ成遂スル為ニ作レル者ナリ徒ニ貨幣ヲ守  
ルノ人ハ不良ノ民ニシテ又自ラ身家ノ計ヲ知ラザ  
ル者ナリ邦國及其身ノ為ニ貨幣ヲ利用スルハ貨幣  
ヲ守ラザルニ在リト此言ハ即テ所謂守銭奴ノ害ヲ  
擧ケタル者ナリ然リト雖モウラルテル氏及其他ノ  
同一主義ノ經濟家ハ財産ヲ貯ヘタル者ノ其財産ヲ  
融通又利用スルコトヲ知ラザルヲ責ルナリ未タ嘗



△補

消費道感三用クトキハ  
生産徒テ道トハ甲ノ消費  
乙ノ生産ニ利益ヲ與フルノ  
謂ナリ即チ富人ノ消費ハ  
貧者ノ利益ニシテ甲ノ國ノ  
消費ハ乙ノ國ノ生産ヲ勸ム  
ル者ナリ今ヤ貧者ヲ以テ謂  
レキノ消費ヲ為シ倒ニ富  
人向テ生産ノ利ヲ加シ經濟  
ノ常理ヲ顛置シテ而シテ却  
テ己レノ生産ノ一旦興起ノ日  
凡テ望ミテ類テカ  
マシトスルハ豈空想ノ類ニ  
アラスヤ

テ其財産ヲ濫用スルコトヲ勸ムルヲ聞カザルナリ  
況ンヤ固ヨリ財産ナキ者ニ向テ先ツ其濫費ヲ促ス  
ヲヤ

△  
人智ノ薄弱ナル之ヲ經驗ニ徵スルニ生産ノカナリ  
シテ先ツ過度ノ消費ヲ慣用スルトキハ忽チ不足ノ  
感ニ急ナルカ故ニ其稍伶俐ナル者ハ必投機冒險以  
テ奇利ヲ射ルノ徒トナリ其愚昧ナル者ハ一變シテ  
詐偽窃取ノ態ヲ學フコトヲ免レズ既ニ投機又ハ詐  
偽ノ流社會ニ公行シ而シテ其拙ナル者ハ敗レ巧ナ  
ル者ハ勝ツニ至テハ風俗腐敗シ信用地ニ墜テテ人

人相欺キ工業ハ徒ニ其名ヲ假リテ以テ財ヲ借リ債  
ヲ起スノ具トナリ商業ハ其性質ヲ轉シテ專投機者  
ノ窠窟トナリ着實ノ事業ハ却テ他ノ奇巧ノ徒ノ為  
ニ壓倒サレ此風漸クニ社會ヲ癩蝕シテ終ニ一國ノ  
衰運ヲ釀成スルニ至テ然後ニ始メテ止マントス  
一人又ハ一家又ハ一村落ノ小部分ニ就テ言フトキ  
ハ先ツ消費ノ過度ナルニ導カレ遂ニ生産ニ勞動ス  
ルコトヲ悟ル者十中ニ一二ナシトセズ此レ前ニ所  
謂一局部ニ適スルノ論ナレト一國ハ大数ナリ縱令  
十中ノ一二ハ卓越拔群ノ輩アリテ奮發ストモ全國



滔々トシテ詐偽投機ノ風ヲ養ヒ成ストキハ遂ニ相  
俱ニ衰運盤渦ノ中ニ墮落スルコトヲ免レザランノ  
ミ故ニ此ノ新奇ノ論ハ或ハ一個ノ黒癘疫質ノ少年  
ヲ鼓舞スル為メ場合ニハ適用スヘシト雖モ一國ヲ  
興ス為ニハ似テ非ナルノ論タルコト疑ナシマシテ  
半開ノ新國ヲ興起スルノ際ニ於テチヤ

更ニ此論ノ遁路ヲ塞カン為ニハ又左ノ事情ニ注意  
スルコトヲ要ス **一國ノ區域ニ限リ** 自然ノ進化ヲ逐  
ツノ邦國ハ其生産物品ト消費物品トハ大槩兩々相  
伴フ者ニシテ麻布ノ生産物アルノ國ハ又麻布ノ消

費物アリ或ハ麻布ト甲シ相類スルノ消費物アルニ  
過キズ而端ノ間其距離甚々相懸隔スルニハ至ラザ  
ルヘシ然ルニ我カ東洋ノ如キ他國ノ進化ヲ假ルノ  
邦國ハ其生産物ト消費物ト彼此兩極ニ懸絶シ生産  
ノ自國物品ト消費ノ他國物品トハ百年又ハ二百年  
ノ度ヲ異ニシ一ト十トノ位ヲ殊ニスル如キ懸隔ノ  
差アルハ已ムヲ得ザルモノナリ此場合ニ當リ前ノ  
新奇ノ説一タヒ之ニ投スルトキハ人心狂躁シテ第  
一ニ非例ノ需要ニ走リ以テ貧困ニ傾キ第二ニ非分  
ノ奇利ヲ射リ以テ風俗ヲ腐敗セシムルハ怪ムヘキ



ニ非サルナリ

故ニ茲ニ之ヲ断言スヘシ曰國ノ經濟ハ生産ニ富シ  
テ後ニ始メテ消費スルコトヲ得ヘシ然後ニ消費又  
轉シテ生産ヲ促スノ場合アリ因々果々輾轉窮リナ  
カルヘシ彼<sup>先ツ</sup>消費ヲ勸メ以テ勞動ヲ促スノ説ノ如  
キハ因ナキニ先ツ果ヲ求ムル者ナリ此人如キノ論  
ハ此レヲ國民ノ腦漿ヨリ蕩除シテ餘毒ナカラシム  
ルニ非サレハ其害ハ將ニ百年ノ後ニ流レントス

第四

天然進化ノ順序ニ遵行セザルノミナラズシテ  
却テ藥ヲ投シテ病ヲ激スルノ謬見ハ前段ニ述  
フル所ニ止マラズ猶此ノ外ニモ種々ノ鑿説アリ  
テ世ニ勢力ヲ有スルニ至ル蓋國民窮困ノ餘  
自愛ト愛國トノ鼓動熱衝スル所トナリ百端心  
ヲ苦メ以テ種々架空ノ奇策ヲ摸捺スル<sup>⑤</sup><sub>⑥</sub>  
此亦人智ノ變象ニシテ恰モ病症ノ第二期以後  
ニ於テ種々ノ變候ヲ現ハス者ト異ナルコトナ  
シ



救治策ノ第一ハ曰ク楮幣ヲ發行シテ以テ通貨  
ノ不足ヲ補フ其第二ハ曰ク外國公債ヲ催ス其  
第三ハ曰ク銀行會社ノ株ヲ外國ニ募ル其第四  
ハ曰ク外國盛大ノ銀行ト條約ヲ結ヒ支店ヲ我  
國ニ設ケ資本ヲ發行セシム  
此ノ四説ハ皆一樣ニ窮困苦心ノ餘ニ發スル人  
智ノ變象ニシテ其結果ハ總テ同一ノ點ニ歸ス  
ル者ナリ蓋其中ノ一ヲ實行スルトキハ一時必  
回復發動ノ假相ヲ現出シ國民ヲシテ踊躍欣抃  
ノ思アリテ病者ノ其病ヲ忘ル、カ如クナラシ

ムヘク而シテ短キハ三四年長キハ十年又ハ十  
五年ノ間ニハ必不良ノ反動ヲ起シ藥毒劇發シ  
テ元氣枯燥、血液壞敗シ或ハ救フヘカラザルノ  
最終期ニ落入ラントス  
第一説楮幣發行ハ既ニ試ミタルノ弊政ニシテ  
世人ノ深ク其結果ニ懲悔シタルノ近例アレハ  
今更ニ喋々スルヲ用ヒサルベシ但シ不換紙幣  
ト及發行ノ數額適當ノ比例ヲ越ユルトノ二弊  
ノ外ニ猶我カ國今日ノ現状ニ就キ一種特別ノ  
情景アリテ經濟學者ノ未タ論及ヲ經ザル者ア



リ第一後進ノ國俄ニ先進ノ國ト交際スルニ當  
テハ國民其國財計ノ實力ヲ忘レテ懸空ニ殷富  
ノ幻想ヲ抱キ生産儲蓄ニ務メズシテ專ラ購買  
消費ヲ事トスルノ勢アルヲ免レズ楮幣發行ハ  
此時ニ際シテ通貨ヲ多カラシメ從テ内地製造  
ノ物品ヲ貴カラシメ假造ノ富ヲ張テ國民ノ空  
想ヲ助クル者ナリ故ニ楮幣ノ發行未タ普通ノ  
比例ヲ越ユルニ至ラザルモ稍ヤ其力ニ依テ融  
通活潑ノ効果ヲ得ルト同時ニ國民ノ外國物品  
ニ對スル購買消費力ヲ增長シ忽チ輸出輸入ノ

不平均ヲ生スヘシ第二外國物品ノ取引ハ專正  
貨ニ依ルカ故ニ纔ニ輸出輸入ノ不平均ヲ感ス  
ルトキハ開港所ノ相場ニ忽チ金楮ノ差ヲ生シ  
而シテ其相場ノ虛聲ハ内地ニ波及スルコト極  
マテ迅速ナルヲ以テ楮幣發行ノ實數ハ猶適當  
ノ比例ノ内ニ在テ其範圍ヲ越エザルモ既ニ兩  
貨ノ差ノ浮沉常ナキニ困ムニ至ル此ノ二ツノ  
事情ハ明治十三四年ノ楮幣下落ノ原因中ノ最  
モ重ナル者ナリ世人或ハ楮幣下落ノ弊ヲ以テ  
偏ニ不換紙幣又ハ發行過多ニ歸シタルハ猶經



濟學者ノ常論ニ拘ハリ我國ニ於ケル一種特別  
ノ事情アルヲ察セザルナリ  
其它ノ三説ハ皆我父母ノ國ヲ以テ埃及ヲラシ  
ムルノ初步ヲ試ル者ナリ嗚呼我國民ヲシテ果  
シテ事業ヲ興スノ智識ト氣力トアラシメバ興  
業切手ヲ發行スルヲ以テ充分ナルヘシ何ソ必  
シモ外國ノ資本ヲ借ルヲ要用トセシ智識ト  
氣力トハ事業ヲ興ス為ノ無形ノ資本ナリ既ニ  
智識ニ淺ク又氣力ニ乏クシテ而シテ徒ラニ外  
國ノ資本ニ倚頼セシトナラハ事業ノ利息ハ果

シテ起債ノ利息ヲ償フニ足ル歟余ハ是ニ於テ  
長崎縣黒崎村ニ開墾ト弘教トヲ業トセル佛國  
ノ宣教師某ノ朴直ナル一言ヲ引用スルヲ以テ足リト  
得ル曰外國公債ハ歐洲人ニシテ之ヲ行フコ  
トヲ得ヘキモ日本國民ハ之ヲ行フノ能力ナシ  
公債ノ説ハ日本ノ為ニ毒害ナリト  
幸ニ外國公債ノ説ハ社會ニ勢力ヲ得ルニ至ラ  
ズト雖余ハ嘗テ或ル經濟學會ノ試験ノ論題ニ  
甲乙點ヲ得タル者ハ皆外國債ノ説ナルコトヲ  
見タリ或ル經濟新聞ノ説ハ盛ニ外國債ノ利ヲ



説キタルヲ見タリ又或ル商工會議ノ建白ニ外  
國債ヲ主張シテ政府ニ勸告シタルヲ見タリ而  
シテ余ハ將來ノ為ニ左ノ一段ヲ豫言スルノ痛  
苦ヲ感スル者ナリ曰我カ國民ノ前途ハ必ス公  
債ノ説ヲ一變シテ私債トナシ各個ニ歐洲ノ富  
豪ニ倚賴シテ此ノ危険不測ナル秘計ニ競奔シ  
以テ一擲ノ投機ヲ試ミントス公債ハ猶ホ限極  
アリテ後日ニ收拾スヘキモ私債ハ即チ國民ヲ  
擧ケテ自ラ不幸ノ位置ニ落入ラシメ其三分ノ  
一ハ事業完成シテ元利ヲ返償スルノ好結果アリ

リト假定スルモ三分ノ二ハ大抵失敗シ其身体  
家族財産ヲ擧ケテ利息ノ餌トナリ資本ノ職役  
トナリ一新以前蝦夷人ノ江州商人ニ使役サレ  
タルカ如ク今年ノ労働ハ去年ノ償却トナルニ  
過キザラントス縦令此ノ如キニ至ラザルモ利  
益ノ大半ハ資本主ノ為ニ占取セラレ己レ其少  
半ヲ得テ財主ト勞力人トノ間ニ居中シ宅地ナ  
ラバ差配人耕地ナラバ永小作ノ類ノ如クニシ  
テ稍ヤ生活ノ便ヲ得ルモ永久遂ニ獨立ノ位置  
ヲ得ルコト能ハザルベシ故ニ私債ハ國民中等







人ノ集マリテ國ヲ成スハ自治ト自衛ノ兩般ノ  
目的ヲ達スルカ為ナルニ外ナラズ若シ其一ヲ  
欲クトキハ國其國ニ非サルナリ故ニ石劍雷斧ノ  
未開ノ上古ニ於ケル兵艦砲機ノ今日ニ於ケル  
總テ皆吾人饑テ食ヒ寒ヘテ衣ルト其必要ノ度  
ヲ同クスル者ニシテ一日モ闕畧シ能フヘキニ  
アラサルナリ特ニ欠畧スヘカラザルノミナラ  
ズ又一日モ輕視スヘカラザルナリ  
中古ノ「イタリヤ」ノ地中海ニ沿ヘル各小國ハ高  
賣國ト稱ヘテ自衛ノ具ヲ闕畧シタル者ナリ、五

百年来、支那ニ向テ自ラ一國ト稱ヘタル琉球ハ  
其一國ト稱フルニ拘ラス又此自衛ノ具ヲ闕畧  
シタル者ナリ「イタリヤ」ハ美術ニ於テ宇内第一  
ト稱スイタリヤト「イスパニヤ」ト戦ヒシトキニ  
戦死スル者一人ニシテ其一人モ亦走死セシニ  
係リシコト中古歴史ニ見ユタリ琉球ハ外患ア  
ルニ當テハ佛神ニ禱ルノ外抵抗ヲ試ミザルヲ  
以テ國是トセリ支那及佛教諸國ハ此ノ自衛ノ  
必要ヲ輕視スルノ習癖アルコト遙ニ「マホメツ  
ト」宗ノ國々ニモ劣レリ若シ支那ヲシテ「トルコ」



ノ位置ニ在ラシメハ、久シク既ニロシヤノ属邑  
タリシナルベシ  
抑、自衛ノ具ノ必要タルハ人々ノ認メテ異議  
ナキ所ナリ唯タ其費用巨大ニシテ新造國ノ辦  
シ難キ所ナルヲ何如セン現今交際禮儀百般文  
物ノ費亦多シ彼此ノ斟酌スル所アリテ緩急  
ノ宜シキヲ量ルハ此レ今日ノ問題ナリ  
炎夏ニ綿入ノ要用ナシ嚴冬ニカタビラノ要用  
ナシ夏綿入ナク冬カタビラナキモ人其貧ヲ笑  
ハサルベシ國トシテ文武ノ備ヲ全クスルコト

能ハザレハ寧ロ其一ヲ欠クモ差支ヘナキカ如  
シ此レ乃チ一種ノ変象ニシテ財政上一時患苦  
ヲ忘ル、ノ便法ナリト雖、其實ハ均シク邦國進  
化ノ軌道ヲ誤マル者ニシテ楮幣外債ト其結果  
ヲ同クスル者ナリ  
何故ニ楮幣外債ト其結果ヲ同クスヘシト云ヤ  
今ノ時ニ當テ凡ソ國ヲ立ル者十年無事ヲ保ツ  
ヘカラザルハ人々ノ知ル所ナリ一朝鄰國ト事  
アリ又ハ佗國ノ紛争ニ關係アルニ當テ若シ自  
衛ノ具ヲ闕キ或ハ其名アリテ其實備ハラザル



トキハ恃ム所ノ者ハ唯タ急ニ外國ノ兵器ヲ購  
買スルノ一方アルノミ此ノ不意ノ變ニ應スル  
為ニ平日特別ノ準備金額アルニ非サレハ急場  
ノ外債ヲ催スカ又ハ外國政府ニ振替ヲ頼ムノ  
外ニ策ナカルベシ此レ乃平日自衛ヲ闕クノ國  
ハ目前ニ高利ナル外債ヲ抱ヘタル者ニシテ其  
實ハ延期拂ノ類ニ均シク彼ノ平日ニ外債ヲ催  
シ又ハ不換楮幣ヲ發シタルト分毫モ其結果ヲ  
異ニスルコトナキニ非ス乎  
或ハ謂ハシ何故ニ生産ト消費ト比例平行セズ

ト云フ乎海關ノ輸出入ハ其平均ヲ保ツヲ見ズ  
乎何故ニ財計困難ナリト云乎金楮ノ價差額ナ  
キヲ見ズ乎ト抑々各國其歳入四分ノ一ヲ使用  
シテ瞬間ノ怠慢ヲ容レザル者ハ自衛ノ具ニア  
ラス乎今果シテ實際ニ於テ國自ラ國タルノ實  
体ヲ備ヘ獨立ノ基本ヲ固クシ以テ中古ノイタ  
リヤ及支那ノ類タルコトヲ免レントセハ十年  
間ノ費要ハ歳入ノ三分一ノ下ニ節畧スルコト  
能ハザルベシ我國民ハ後進國ノ免レザル不幸  
アルガ為ニ早晚一タヒハ此ノ非常巨大ノ費ヲ



償フカ又ハ永久ニ琉球ノ國是ヲ守ルカノ兩塗  
ノ一ヲ擇ハザルコトヲ得ス今ハ此ノ一大負擔  
一大借債ヲ延期シテ經過スルモノナリ果シテ  
此ノ急務ヲ舉行シ必要ヲ消費スルノ日ニ至ラ  
バ我カ生産ハ果シテ之ヲ償フニ足ルカ輸出入  
及經濟ノ情狀ハ更ニ今日ニ比較シテ一層ノ變  
態ヲ顯スニ至ラザルコトヲ得ベキカ  
本篇ハ外交政畧ヲ論スルヲ目的トスル者ニ非  
ス蓋外交政畧ニ至テハ自ラ遠大ノ目的ト緩急  
ノ事宜アリテ大勢ヲ達觀スルノ人ニ非サルヨ

リハ佗人ノ窺ヒ知ル所ニ非サルヘシ故ニ自衛  
ノ具ヲ備フルノ遲速ニ至テモ或ハ目今ニ舉行  
スルカ又ハ數年ノ後ニ於テスルカハ英雄ノ胸  
算ニ存スル者ニシテ理論ノ範圍ニ局促セラレ  
ヘキニ非サルヘシ但シ經濟上ニ於テ國民ノ多  
數ハ此一大負擔ヲ延期シタルコトヲ忘レ太平  
雍々トシテ却テ百年全盛ノ國ト形相ノ上ニ係  
ル不急ノ需要ヲ競争シ金碧華麗ノ風俗ニ浸化  
シテ子孫ノ為ニ巨大ノ國債ヲ遺スハ亦人智ノ  
弱点ニアラズ乎



本章ノ終ニ於テ歴史上「ローマ」ノ盛衰ノ事ヲ記  
念セル讀者ノ注意ヲ呼起スベシ「セルマン」ノ軍  
ノ「ロトマ」ノ都ニ打入リシ時ニ兵卒ハ先ツ其書  
籍庫ニ放火シテ曰此レ亡國ノ無用物ナリト夫  
レ書籍何ノ罪カアラン又其自衛ノ具ヲ怠ルニ  
由ルノミ「ドレイバル」氏ノ記事ニ云「ローマ」全盛  
ノ時ハ恰モ腐敗ノ極度ニ達セシ時ナリシ此時  
ノ人ハ「人生ハ一大宴會」ノ如クナルベシト云ヘ  
ル語ヲ以テ生活ノ準則トシ或ハ金銀珠玉ノ眩  
耀セル盃盤几卓ノ間ニ飲食シ或ハ宏壯華麗ナ

ル沐浴處圓戯場ニ歡樂ヲ取り上下皆勢カヲ以  
テ最大事物トシ良民ノ財産ヲ没収シ重税ヲ課  
歛スルヲ以テ戦功ノ正當ナル報酬トシタリ皇  
帝ハ専ラ勢力ノ看板タルノミニシテ佗ニ國民  
ニ對スルノ義務アルコト無カリキ故ニ此時社  
會ノ外面ハ華美ヲ極メシト雖其華美ハ昔時地  
中海ヲ照シタル燐火ノ如ク腐敗ニ出テ、腐敗  
ニ歸ルニ過ギザリシト



Handwritten Japanese text in vertical columns, likely a manuscript or letter. The text is written in a cursive style (sōsho) and is contained within a red-lined border. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely, but appear to be a continuous passage of text.

伊藤博文文書

